



関連ウェブサイトは、  
[www.SOAS.ac.uk](http://www.SOAS.ac.uk)  
[www.SOAS.ac.uk/Library](http://www.SOAS.ac.uk/Library)  
[www.SOAS.ac.uk/centres/Japan/htm](http://www.SOAS.ac.uk/centres/Japan/htm)  
[www.Sainsbury-Institute.org](http://www.Sainsbury-Institute.org)  
[www.japansociety.org.uk](http://www.japansociety.org.uk)



## 現代日本資料センター オンライン電子本情報

坂口和子

コンピュータの画面で読む電子本というと、これまではCD-ROMなどを中心としたオフライン媒体が主流であったが、空前のブームとなったインターネットの普及によって、いま新たにオンラインの電子本が急速に伸びつつある。CDは上書き可能なパーソナル・コンピュータのデータ保存用として一般化する一方、電子本を読む手段としては次第に陳腐化している。ひとつにはオフライン媒体が内容更新不可能ということにもよる。他方、オンラインは大きな許容量を誇るサーバー上の保管だから更新がたやすく、流通コストが一切不要でスペースの問題もない。いつでも必要なだけ供給することができるのでオンデマンド出版や、品切れあるいは絶版本の復刊も容易だ。さらに、ハイパーリンクで参考文献に繋げることができる。視覚障害者のために点字に加工することやマルチメディアで音声化するなど、ソフトウェア次第で様々な読み方や使い方が可能である。そこで今回は、今後ますます増加すると思われるオンライン電子本のデータベースを調べてみることにする。

### ゲーテンベルク計画 (<http://promo.net.pg/>)

情報の公開と知識の共有は民主主義を支える基盤である。電子本の草分け「ゲーテンベルク計画」は、文化遺産は人々の共有財産という理念のもとに、1971年、当時イリノイ大学に在籍していたマイケル・ハートによって始められた。そもそもインターネットは軍事目的のために開発されたものだが、このゲーテンベルク計画は平和利用のために学術用として転用された一例で、その根底にはアメリカの建国精神と民主主義の理念が色濃く反映している。アメリカ独立宣言から聖書、国勢調査、大統領就任演説、文学作品まで幅広いジャンルを扱い、現在3,000を越える文献を収録する。英語の文献が大半を占めるのは当然だが、他言語による原典も含まれ、芥川龍之介の『羅生門』と日本語訳『マルチン・ルターの小信仰問答書』が収録されている。最大の特色は高度な目録検索機能で、著者名、書名、分類項目、注記、言語、及び米議会図書館の目録分類と6つの異なるフィールドを組み合わせることもできる。議会図書館の件名目録が詳細に活かされているので、この分類法に馴染んだ利用者には使い易いだろう。例えば、東アジアの言語及び文学を示すPLの項目をクリックすると『羅生門』、岡倉覚三の『茶の本』、ラフカディオ・ハーンの『怪談』等が出てきて、さらに件名をクリックするとそれぞれの件名項目グループが集合するという具合である。ダウンロードは現在のところ基本的なテキスト形式のみに限定している。

オンラインブックページ (<http://digital.library.upenn.edu/books/>)

電子化テキストプロジェクトは、前述の「ゲーテンベルク計画」の他にも「オックスフォード大学テキストアーカイブ」 (<http://ota.ahds.ac.uk/index.html>) など、世界で個々に構築・無料公開されている。「オンラインブックページ」は、そうした世界に散らばる30余りのデータベースの垣根を取り払い、共通のインターフェース

で横断検索することができるのでありがたい。ジョン・マーク・オッカーブルームが維持・管理しており、一昨年、サーバーをカーネギー・メロン大学からペンシルベニア大学に移した。1993年のサービス開始以来これまでに12,000点以上の電子本を集めて収録する。大半は英語圏の文献だがその他の国の作品もあり、因みに日本の作品では夏目漱石の『こころ』の英訳などが含まれている。著者名・書名検索に加えて、米議会図書館の目録システムによる項目が充実しており、分類された表から該当の項目をクリックすると関連の作品が現われる。ハイパーリンクの威力を最大限に活かして関連資料の掲載先や詳細情報のページにリンクしなかなかに使い勝手がよい。発禁本や各賞の授賞作品を集めたリストもあり、「女性作家頌」のリストでは作家名あるいは国別のリストからも調べることができる。日本の項には紫式部、清少納言、小野小町、阿仏尼などの英訳作品と解説が附されているので一見の価値あり。

青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>)

市場主義が支配する出版産業の機構では、採算の合わない本は出版の機会を与えられず、売れ残りはあっさり廃刊・断裁処分され、品切れになったものでもまとまった部数がなければ復刊されない。出版から一年未満で品切れ絶版になるものも珍しくないという。「青空文庫」は書き手の「読んで欲しい」という願いと、読者の「読みたい」という欲求に応える私設の電子図書館である。フリージャーナリストの富田倫生氏が呼びかけ人となって1997年に開設した。日本版ゲーテンベルク計画ともいえるこの青空文庫は、作家の死後50年を経て著作権の失効した作品ばかりでなく、作者の同意を得て自由利用できるものをインターネット上で無料公開する。電子化する作品の選択、入力、校正、編集、ファイル作成はすべてボランティアの協力に頼り、「蔵書数」は2000年末で既に1,200タイトルを数える。日本の執筆者ばかりでなく



外国の作家の翻訳、日本の作家の英訳本も収録され、文学作品の他に法律文もある。

デジタルの本のみ扱う青空文庫の空間は、しかしきわめてヒューマンできめ細かな利用者への気配りが感じられるのが嬉しい。著者名とその作品名が50音順に整理された文字をクリックすると青空文庫の「図書カード」が現われる。図書館のカード目録に当たるこのカードには、書誌情報ばかりでなく著者の紹介と作品に対する短評が添えられているので重宝する。利用者は圧縮テキスト、HTML、エキスパンドブックの三形式の中から提供可能なファイルをダウンロードすることができる。しかもテキストファイルはふりがな（ルビ）付きとルビなしの二種類が用意されている。利用に関する制約が寛大なことが特徴で、著作権のある一部の作品を除いて商業目的の利用も容認しており、ダウンロードしたファイルは有償・無償を問わず複製し再配布することも許されている。著作権の有効な作品は、原則的に著作権者の確保したサーバースペースに置き青空文庫の図書カードからリンクする仕組みだ。訂正のお知らせ、随時最新情報を伝えるために更新の記録を時系列に公表する「そらもよう」や、「みずたまり」と名付けられた読者の意見交換の掲示板もあり、単に収録した電子本のリストではなく交流の場となっている点も見逃せない。

電子化された日本語テキスト  
(<http://jcmac5.jc.meisei.u.ac.jp/etext-i.htm>)

明星大学の柴田雅生氏が自身の学術研究目的から作り始めたリストで、有料・無料の如何に関わらずCD-ROMを含む電子化された日本の文学作品を網羅的に収録する。上記の「青空文庫」で見つからなかったものも、このリストで情報を得ることが多い。サーチエンジ

ンはないが日本史の時代区分に沿って江戸時代までは作品成立年代順、明治以降は作家生年順に配列された索引があり、さらに作家の生年・没年・氏名、及び作品の50音順索引がある。自然に日本文学史の全体像がつかめるよう工夫された索引だ。また特定の作家についての情報を得るには直接作家索引から探すこともできる。更新は随時なされており、新着テキスト、掲載履歴、改訂情報で最新情報が得られる。類似のものに福井大学教育学部 岡島昭浩氏の「日本文学等テキストファイル」(<http://kuzan.f-edu.fukui-u.ac.jp/bungaku.htm>)があり、日本文学テキストにアクセスできる短評付きのサイト情報は有益だ。また、甲南女子大学 菊池真一氏のまとめた、「日本文学関係テキストファイル」([www.konan-wu.ac.jp/~kikuchi/linkd.html](http://www.konan-wu.ac.jp/~kikuchi/linkd.html))はURLが明記されているので便利。

日本語テキスト・イニシアティブ  
(<http://etext.lib.virginia.edu/japanese/>)

バージニア大学とピッツバーグ大学との共同による日本語テキスト・イニシアティブは、『万葉集』から横光利一の『機械』まで日本の文学作品をSGML (Standard Generalized Markup Language) によるテキストと画像を用いて構築するオンラインアーカイブである。収録数は少ないが(2000年末現在で40タイトル)、日本語を母国語としない利用者を対象としているため、テキストには英訳がほどこされ英語と日本語のいずれでも検索できるのが特徴だ。母体であるバージニア大学のテキスト・イニシアティブが、商業電子テキストに対応するべく学術研究への寄与を目的として設立されたものであるため、無償でインターネット上に提供できるもののみ取り扱い、テキストや書誌的記述の正確度と完成度には定評がある。書物の挿絵や他の視覚的資料(例えば特殊コレクションからとった原稿ペー

ジなど)も可能な限り収めている。さらにユニークなのは『小倉百人一首』を日英対訳テキストとして公開していることで、教材としても利用価値が高い。文化遺産を電子化して保存・活用するデジタルアーカイブの発展に寄与した活動と、専門家、一般利用者の双方に有益な内容が評価され、このほどデジタルフロンティア京都実行委員会より「デジタルアーカイブ賞」が贈られた。

インターネットへのアクセスさえあれば、欲しい本がいつでもどこでも好きな時に無料で読めるというのは、読者にとっては福音だ。しかし、出版業界や知的所有権に依存する側にとっては、生活基盤を揺さぶる脅威に違いない。われわれの生活に深くかかわるデジタルの世紀の著作権問題は、なかなか複雑で一筋縄ではいかない難しさがあるが、知的文化遺産は共有財産という民主主義の根幹にふれる考え方と、著作権の係わり合いの間隙を縫って出来た電子本の今後の成長を見守っていきたい。

